

平成24年12月(2012年) No.564

年末雑感

会長 合原一夫

今年も早や師走を迎えました。街ではクリスマスツリーやサンタクロースの飾りもの、ジングルベルのメロディーで賑やかになるのも年末風景の一つです。考えてみると一年が経つのは早いものですね。今年の夏は暑いと思っていたらすぐ秋、そして急に寒さ一段と厳しく感じられる今日この頃です。一年過ぎるのが早いと感じるのは年をとった証拠だとよく言われます。私も後期高齢者の仲間入りして体力の落ちてきたことを実感しております。しかし、モノは考えようです。体の動く間は何でもいいから一生懸命取り組もうと。

映像を半世紀も続けてやってきて、たくさんの仲間と知り合い交流を深めて来れたのは幸せでした。どれだけ人生を豊かにしてきたことか計り知れないものがあります。これからも仲間との交流を大切にしていきたいと思えます。

ですが、ビデオクラブに入っている会員さんが高齢化してきて、若い方がほとんど入ってきません。毎年平均年齢が上がっていく一方です。

従って、会の活動を支える世話役さんの高齢化で運営上何かと課題が出てきたことは否めません。

ビデオカメラや動画カメラを持っている若い方は数多く居られます。彼らのほとんどは撮りっ放しで満足し、一部はインターネット等にそのまま流して楽しんでおられる様です。私達のように編集したり音楽やナレーションを入れたりするということは頭から考えていない様です。一つは、編集して作品にするには、かなりの出費と知識、手間がかかるということです。もっと簡単に作品づくりが出来る機材、ソフトの開発は出来ないものか、現状はだんだん遠く行ってしまっている様に思えてなりません。

12月例会のお知らせ

今年最後の12月例会は第4土曜 22日 18時より、いつもの難波市民学習センター（JR難波OCATビル4階）にて開催。
 来期の年会費8千円を会計に納めてください。幹事会、世話役会は別紙案内の通りよろしく。

例会この一年

会長 合原一夫

例会は月1回の行事で、この日を楽しみにして作品づくりをし、みんなに見てもらえることを一つの生き甲斐にしていられる会員さんが大勢いらっしゃいます。わがOMCは曲がりなりにも盛会をずっと続けて参りました。ところが今年11月例会で出席者が20人を割り、作品数も1桁の8本という少なさでした。夏頃までは時間一杯の出品数で司会者も大忙しの進行ぶりでしたが、9月以後徐々に作品数が減って遂に1桁台になってしまったのです。

過去6年間の記録を調べてみますと、平成22年10月例会で一度だけ8本という最低記録が残されていました。ですから2年ぶりということです。前回はその翌月は15本と盛り返しています。

さて、今回は如何でしょうか。会員さんの高齢化も進んでいますので、作品に取り組むのがしんどくなってきた、と思われている方が多くなったのではないかと、或は何をテーマに撮ったらいいのか迷っている、そして、カメラがカード方式になり編集もついていけなくなってきたな、と時代に取り残されたと感じる方々。考えてみれば作品を持ってきて下さる方が少なくなってくる、というのは避けられない宿命のようにも思えます。私自身ももっと頑張ってお作らなければと思っていますのですが…。

例会での作品上映は、本当は10～12本位が司会上からは最適です。夏までのように15本前後だと上映するだけで時間一杯となりあわただしさがありました。少な目の作品のときはゆっくりと1作1作について意見なり感想なりを述べ合って掘り下げた司会が出来るようになります。先月の関氏の司会は誠に適切で、8本の作品ながらほぼ時間一杯の進行で、さすが、ベテランの味。さて、これからはアーカイブスやリバイバル作品の上映も歓迎、新作の少ない

時は上映しますのでどうぞご持参ください。

■予告：1月例会は第3日曜13日午後1時より第3研修室で開催。作品上映及び総会の後、夕方5時から5階で新年会開催。

1 1月例会のレポート

11月の例会は24日の午後6時より何時もの例会場で開催しました。司会、関さん、書記、有村さん、デッキ係に井上さん、河合さん、江村さん、受付兼照明係を宮崎さんの担当で進行了ました。

◆出席者：有村、井上、江村、上田、岡本、蟹江、河合、黒田、合原、進藤、関、高瀬、華岡、前田、宮崎、森下、山本、(敬称略)の17人と作品上映本数8本でした。

◆上映作品(今月の記録と講評担当：有村世話役です)

1) 宇出津のキリコ祭(後編)(HDV)

河合源七郎さん 13分52秒

先月上映されました前編では八坂神社の祭の宵宮で、沢山のキリコが大勢の担ぎ手によって登場しましたが、今回はその本宮の情景です。お昼なのか、と思っていたらこれも夜でした。お聞きしましたら、夜9時頃から一杯飲んだ人達が上半身裸で神輿を担いで大暴れます。焚き火の中に投げ入れたり、川に放り投げて担ぎ手も全員飛び込んで神輿を岸壁にぶち当てたり、すさまじい画面が展開します。何か遺恨があってやってるのか、と思う位の迫力です。神輿の形が崩れるばかりの有様が長年の伝統だそうです。やっと神社に到着して一暴れして終わります。2年に涉っての撮影だそうで、ものすごい迫力がありました。

2) 鉄橋解体(BD)

江村一郎さん 6分20秒

兵庫県餘部の鉄橋がコンクリート橋に変わるという噂のある頃から何回現地に通って撮影されたでしょう。いよいよその鉄橋

の解体が始まりました。何でも物が無くなると云うのは一抹の寂しさを感じるものですが、これは明治、大正、昭和、平成と一世を風靡した鉄橋です。残念な思いが交錯します。それを上手に表現しておられます。でも出来るだけ解体鉄橋のないカットは省いて代行バスがどの位の期間走ったのか、解体にどの位の期間を要したのか、とつい思ってしまいます。テロップなどで表現され、終わりは出来れば完全に無くなった所で終わると良いなあーと思いましたが、欲でしょうか。

3) 八方尾根の出来事 (BD)

有村 博さん 10分00秒

私達夫婦は元々山が大好きで旅行に行くと言えばこんな事になります。先月発表しました五竜と樽池高原に続いて3日目の八方尾根を見て頂きました。幸いに都会に住む私達があまり遭遇した事のない出来事に出くわしました。ヘリの物資輸送もそうですが、結婚式でのホルンの4重奏は初めて見ました。ホルンは曲の階調用の穴がないので、単調な曲しか吹けないとは聞いていましたが4人が同時に演奏しているのは珍しいと思います。私事の記録を見て頂き有り難うございました。

4) 少女剣士 (BD)

前田茂夫さん 7分00秒

いきなり真剣の日本刀での試し切りが出ます。やがてタイトルと共に居合刀を持った小学生位の可愛い少女が広い道場で只一人居合いを始めます。長い居合刀が長くてなかなか鞘に収まりません。やがて師範の人が居て要領を教えます。この少女は師範のお孫さんとか。少女の居合刀には刃が着いてないのでケガをする事はないと後から説明されて安心しました。大人の人達の居合も少し見せて頂きました。兵庫県丹波市柏原(かいばら)の居合道場で撮影されたそうです。まことに珍しい映像を見せて頂

きました。

5) ハッカ土楼 (BD)

山本正夢さん 11分30秒

山本さんの一人旅、今回は世界遺産にもなっている中国福建省にある客家(ハッカ)土楼を紹介されました。昔、中原と言う所から移住した正統漢族が原住民との争いが絶えず防衛的に建てた円形、方形の建物で12~20世紀に建てられたものだそうです。食事をしたり会話をする住人が細かく撮影されています。会話を通じての交流がないと出来ないでしょう。棚田やタバコの栽培等も紹介されます。現在では住むのが不便なのか、過疎化が進んでいる様で無人の朽ちた土楼が描かれて未来への暗示で終わります。中で女性が歌う三人組の演奏がありましたが、何が目的で誰に聞かせているのか、だけが判りませんでした。何時も知らない土地を見せて頂き有り難い事だと思います。

6) レメソス近郊の遺跡 (BD)

華岡 汪さん 9分55秒

ご夫婦で海外旅行を楽しまれている華岡さん、東地中海のトルコに近い、四国の半分程のキプロス島に行き、撮影を楽しまれた様です。島の南部の港湾都市レメソスに滞在されて周辺の遺跡を観光されました。十字軍にまつわる13世紀建造のコロッシ城からクレオス遺跡へ、公衆浴場のモザイクが美しい。ローマ式野外劇場もありました。新石器時代の円形住居のキロキティア遺跡からレメソス市街地の状況が描かれます。そして中世博物館になっているレメソス城を最後にホテルへ、夕景の港が出て終わります。これまた全く知らない土地でしたので興味深く拝見しました。

7) 信楽寸描 (BD)

進藤信男さん 9分50秒

OMCの来年の撮影会候補地の滋賀県甲

賀市信楽町をロケハンしてられました。ここはたぬきの焼き物を中心の信楽焼で有名な所で町中のあちこちに昔は、登り窯があった様です。現在では火入れしてない窯、放置された窯、壊されたのぼり窯跡が見受けられます。そんな中で唯一現在も可動している江戸時代に作られたのぼり窯がありますが、1年の中で2月と8月しか焚かないそうです。早くて来年の2月のいつ頃火入れが行われるのか、撮影会の日取り調整が難しい所ですね。朝宮茶の茶畑から紫香楽宮跡が紹介されて終わります。厳寒の夜ともなれば撮影も大変でしょうし、考えものですね。

8) 祈りの山 (BD)

高瀬辰雄さん

8分15秒

京都市伏見区にある、全国のお稲荷さんの総本宮、伏見稲荷大社では11月8日に火焚祭が盛大に行われています。全国の崇敬者から奉納された火焚串を焚きあげ、大祓詞を奉唱して罪障消滅、万福招来を祈ります。高瀬さんはこれを撮影、千本鳥居を稲荷信仰の源となる稲荷山へと登ります。お山参詣道を清滝から壺の峰末広大神へ、京都市街を俯瞰して終わります。のりとの荘厳な音声が雰囲気盛り上げて見事な作品になりました。

これで上映を終わり、何時もの様に居酒屋組と喫茶組に別れて2次会を楽しみました。

能登はやさしや

河合源七郎

私はここ数年、能登の風土と文化にのめり込んで年に数回訪れ、多様な神の存在と多彩な祭り、そして豊かな人情に酔い痴れてきた。

能登は、深い山に隔てられた辺境の地と考えられ勝ちだが、実は日本海という「海の道」を通じて、日本各地や、朝鮮半島、

中国大陸との交流があり、古くから多くの人々が渡って来た。彼らによって、文化や技術が齎(もたら)されると同時に、彼らの神もやって来た。

「少彦名命」など漂着神(ひょうちゃくしん)と呼ばれる神である。

だから、能登では、土着の産土神(うぶすながみ)、各地から勧請された神、そして自分たちの祖先神に加えてこれらの漂着神と、多種多様の神様が祀られている。

神様が多様であれば、それに伴って祭りも多彩な展開をしてきたのは当然の成り行きであった。能登を代表する祭り「キリコ祭り」は、その中に「夏越の祭り」、「祇園祭り」、「七夕祭り」、「納涼(おすずみ)祭り」などいろいろな祭りを包含しつつ、「キリコが出動する総ての祭り」を「キリコ祭り」と総称し、能登全体で150以上の村で行われていると言われている。

能登を太平洋岸から見ると、耕地の少ない山国の様に見えるが、漁業、林業、塩業と米作以外の経済活動が豊かで、祭りには惜しみなく財を投じた。村の小さな鎮守でも金色に輝く重厚な神輿をもち、総漆塗り大型のキリコを何台も持って、豪華な祭りが行われるようになった。

能登の祭りに、大型バスで訪れるツアーはない。祭りには観光客でなく、友達や親戚を彼らは遠くから招き、夕方から宴を催す。宴席が終わって神事に参列し、神輿が出御するのは夜の10時ころ、祭りは夜半にクライマックスに達し、朝方まで続く祭りも少なくない。

その中で、遠方から毎年のように訪れる私のような、ビデオカメラをもった闖(ちん)入者も永年の友のごとく受け入れてくれる。酒の席に呼び込まれることも珍しくない。彼らにとって、「祭り」は常に「俺らが祭り」であり、遠来の客はみんな「百年の知己」なのである。

「能登はやさしや 土までも」の諺は、今なお健在である。